

『就実大学大学院教育学研究科紀要 2018（第3号）』 抜刷
就実大学大学院教育学研究科 2018年3月10日 発行

身体表現鑑賞時における教具の違いが 内発的動機づけに及ぼす影響

**The influence of differences in Teaching Material at Body Expressions on
Intrinsic Motivation**

日下公貴・飯田智行

身体表現鑑賞時における教具の違いが 内発的動機づけに及ぼす影響

日下 公貴・飯田智行

The influence of differences in Teaching Material at Body Expressions on Intrinsic Motivation

Koki Hishimo, Tomoyuki Iida

抄録

幼児教育現場で行われている身体表現は多様な動き経験と十分な活動量の確保が期待される活動である。しかし、指導が難しいことが課題とされており、苦手意識をもつ幼児が多いことや、活動時の保育者の幼児に対する動機づけが難しいことが指摘されている。本研究では大学生を対象に何も持たない状態と教具（新聞紙・タオル・スカーフ・ポンポン）を持った状態の身体表現中の動画を鑑賞させ、5件法を用いた楽しさに関するアンケートに回答させた。その結果、スカーフ条件・ポンポン条件が他の条件と比較し、有意な高値を示した。身体表現鑑賞時に、普段触れることの少ない素材であり、彩度の高い色の教具を使用することで楽しそうに見えることが明らかになった。

キーワード：身体表現, 教具, 内発的動機づけ

I. 緒言

幼児期はブレ・ゴールデンエイジにあたり、発達が著しく、特に神経系は幼児期にほぼ成人と同様になるまでに発達する¹⁾。この時期に発達段階に応じた様々な活動や運動を通して、多様な動きを経験させることにより、基本的な日常動作や、危険回避動作、将来的にスポーツに結びつく動作が習得されていく²⁾。また、この時期には60分の運動を行うことが望ましいとされており、生活の中で十分な運動量の確保が必要とされる³⁾。しかし、現代の幼児は、家事の手伝いなど、日常生活において多様な動きを経験する機会が減少している²⁾。また、「時間・空間・仲間」の三間の減少や、科学技術の飛躍的発達により生活全体が便利になっていることから、運動機会、運動量が減少している。これらのことが原因となり、1日60分以上の運動を行うことができていない幼児が約4割いる²⁾。以上のことから、幼児教育現場において、発達段階を考慮した多様な動きを習得できる活動を取り入れ、身体を動かす機会を十分に確保することが必要である。一方で、運動遊びの指導理念や幼児教育現場における運動能力の施策の現状は、子どもの体力低下の改善に対して

必ずしも効果的な状態ではないことが指摘されている⁴⁾。

『幼稚園教育要領』⁵⁾には、幼児期の健やかな成長のために、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」からなる5領域が設定されている。幼児期は様々な側面が、相互に影響を与え合いながら発達していく⁵⁾。このことから、幼児教育現場において、5領域の複数のねらいの達成が期待される活動が必要であると考えられる。その活動の一つとして、身体表現があげられる。身体表現は、体を使った遊びに伴う自己表現や他者とのコミュニケーション等の精神活動を促し、言葉の発達ならびに健やかな心と体をバランスよく育む活動である⁶⁾。また、身体表現は子どもたちが自分の感性や知性を活かしてイメージを膨らませ、体を使って動きを工夫し、表現する喜びを味わうことがねらいとされている⁷⁾。さらに、身体表現は活動を通して友達とのかかわりが豊かになることが明らかにされている⁸⁾。以上のことから、身体表現は『幼稚園教育要領』の5領域における様々なねらいの達成が期待される活動である。

身体表現は、文部科学省が提唱する多様な動きをつくる運動要素（ア）体のバランスをとる運動（イ）体を移動する運動（ウ）用具を操作する運動（エ）力試しの運動（オ）基本的な動きを組み合わせる運動⁹⁾を、題材や教具などの環境構成を通して取り入れることができる。このことから、身体表現を行うことによって、多様な動きの経験と一定の運動量の確保が期待される。しかし、身体表現は苦手意識をもつ幼児が多いことや、保育者が指導に困難を感じていること、環境構成が難しいこと、幼児への動機付けが難しいことが課題としてあげられている¹⁰⁾。身体表現は表現力の向上に関する検討が行われている一方で、これまでの身体表現の研究が現場指導に密着した実践研究に偏っており、事例研究だけでは保育者の日々の指導や教育体制のあり方、環境構成に活用できる普遍的な情報を得ることは難しいと指摘している⁶⁾。身体表現における具体的な環境構成の検討した研究は少なく、現在の身体表現の課題といえる。

活動に取り組むためには動機づけが必要であり、特に、個人において活動自体に楽しさや喜びを感じる内発的動機づけ¹¹⁾によって、自発的に活動に取り組むことができる。身体表現においても内発的動機づけにつながる指導を行うことによって、身体表現が苦手な幼児でも活動に取り組めるようになることが考えられる。幼児教育現場の環境構成では、様々な教具が使用されているが、身体表現において、教具と活動に対する動機づけとの関係を検討した研究は見当たらない。身体表現にて扱う教具が動機づけに及ぼす影響を明らかにすることで、教師が行う環境構成の一選択肢となりうるものが期待される。

そこで本研究は、身体表現における教具の違いが、内発的動機づけに及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。

II. 方法

1. 対象者

健常な大学生 男性15名（年齢 21.3 ± 0.5 歳）、女性43名（年齢 21.5 ± 0.5 歳）、計58名を対象とした。対象者には先だって本研究の目的について説明し、参加の同意を得た。

2. 測定方法

大学生男女1名ずつが腕を大きく動かす簡単な身体運動をビデオカメラにて撮影し、対象者にその動画を見せた。その後、楽しさに関するアンケート（資料1）に答えさせた。動画を見せる際、使用した教具を実際に見たり、触ったりできるようにそれぞれ対象者の目の前に配置した。動画は2回通り流し、すべての動画視聴後にすぐにアンケートを記入させ、その場で回収した。

3. 測定条件

(1)対象者に見せた動画の動き

以下の動きをBPM=120のテンポに設定し、それぞれ動きで8カウント、合計24カウントを続けて行った。

A. 両手で遠くの人に手を振る動き

左右対称に両手を肩の高さで横に伸ばした状態から、半円を頭の上で描くように両手を動かす。4拍で手が元の位置に手が戻るように動かす。

B. 両手を体の前で八の字に振る動き

両手をそろえて伸ばし、体のまえて八の字を描くように動かす。4拍で手が元の位置に戻るように動かす。

C. 両手をからだの前で大きく円を描く動き

左右対称に両手を肩の高さで伸ばし、内回りに体の前で大きく円を描くように動かす。2拍で手が元の位置に戻るように動かす。

(2)条件の種類

a. 統制条件

両手に何も持たずに上記の動きを行った（図1）。

b. 新聞紙条件

新聞紙を縦に半分に切ったものを使用した。両手で1枚ずつ、それぞれの新聞紙の角を握った状態で行った（図2）。



図1. 身体表現中の動画（統制条件）



図2. 身体表現中の動画（新聞紙）

c. タオル条件

タオル（縦.約30cm 横.約80cm）を使用した。右手に水色のタオル、左手に黄色のタオルをそれぞれのタオルの横の真ん中の部分を握った状態で行った（図3）。

d. スカーフ条件

浮遊スカーフ60 B-2306を使用した。右手に青色のスカーフ、左手に黄色のスカーフをそれぞれのスカーフの角を握った状態で行った（図4）。

e. ポンポン条件

ポンポン（直径約45センチ）を使用した。右手に青色のポンポン、左手に黄色のポンポンをそれぞれのポンポンの中心を握った状態で行った（図5）。

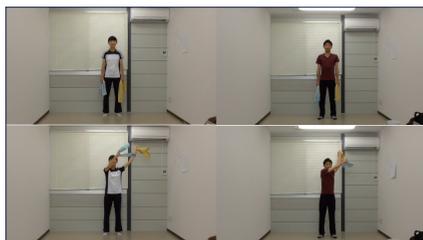


図3. 身体表現中の動画（タオル）



図4. 身体表現中の動画（スカーフ）



図5. 身体表現中の動画（ポンポン条件）

4. 測定項目

5件法を用いた楽しさを問うアンケートに答えさせた。アンケートはそれぞれの条件に対し、1.全く楽しそうではないから5.とても楽しそうの5段階で答えるものとした。同時に対象者のこれまでのダンス経験（学校での授業を除く）の有無を調査した。得られたデータから、各条件においてアンケート結果の平均を算出し、条件間で比較した。またダンス経験あり群とダンス経験なし群において各条件のアンケート結果の平均を算出し、群間で比較した。

5. 統計処理

測定値は平均値±標準偏差で示した。各条件におけるアンケート結果の比較を繰り返しのある一元配置分散分析を行った。ダンス経験あり群、ダンス経験なし群間の各条件の比較を、対応無し t 検定を行った。統計処理は（Excel）を用いて行い、有意水準は5%未満とした。

Ⅲ. 結果

アンケートの回収率は100%であった。各条件の平均得点は統制条件 2.2 ± 0.8 点、新聞紙条件 3.0 ± 0.9 点、タオル条件 3.1 ± 0.9 点、ボンボン条件 4.1 ± 0.8 点、スカーフ条件 4.3 ± 0.8 点であった。各条件間の比較において、統制条件が他の条件と比較して有意な低値を示し、スカーフ条件・ボンボン条件がタオル条件・新聞紙条件と比較して有意な高値を示した（図6）。ダンス経験の有無間の各条件の平均の比較において、有意な差は認められなかった（図7-11）。

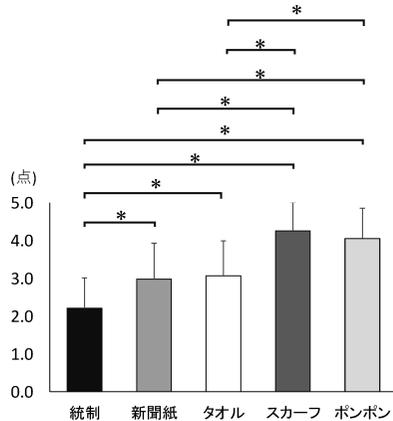


図6. 各条件間の楽しさの比較 (* : $p < 0.05$)

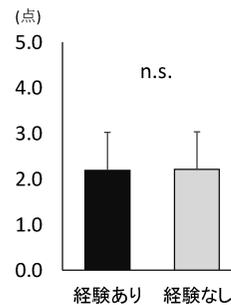


図7. 経験間の比較 (統制条件)

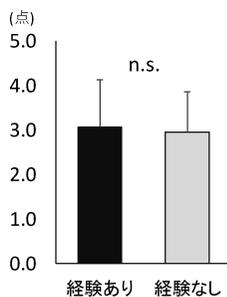


図8. 経験間の比較 (新聞紙)

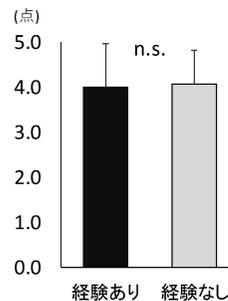


図9. 経験間の比較 (タオル)

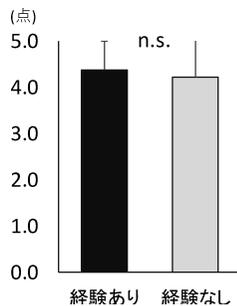


図10. 経験間の比較 (スカーフ)

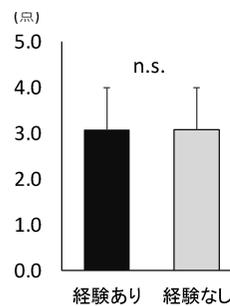


図11. 経験間の比較 (ボンボン)

IV. 考察

身体表現中の動画を見た際の楽しさに関するアンケートの結果、新聞紙条件、タオル条件、スカーフ条件、ボンボン条件が統制条件と比較して有意な高値を示した（図6）。教具を使用することにより、活動に対する意欲関心が高まることが明らかにされている¹²⁾。また、拡大的で活動性の高い動作は肯定的な感情に結びつく¹³⁾。本研究においても、教具を使用することにより、活動に対する意欲関心を高め、何も持たない状態に比べ、表現中の動作がより拡大的に見えたため、教具を持った条件が統制条件と比較して楽しそうに見えたことが考えられた。

教具を持った条件の中でもスカーフ条件とボンボン条件が新聞紙条件、タオル条件と比較して有意な高値を示した（図6）。身体表現において教具を使用した際には、教具によって、そのものの素材を楽しむことが明らかにされている¹⁴⁾。また、内発的動機づけを促進する好奇心は、新しいものや珍しい物への探索や接近である¹⁵⁾。本研究では、動画再生と同時に実際の教具に触れることができ、対象者は教具の素材を味わうことができる状態であった。スカーフ、ボンボンは新聞紙・タオルに比べ、普段の生活の中で触れることの少ない珍しい素材であることが予想されるため、教具を使用した条件の中でも興味を持ったことが考えられる。また、本研究で使用したスカーフとボンボンは、新聞紙、タオルに比べて彩度が高い色をしていた。色がもたらす心情変化は、はっきりとした派手な色ほど、陽気で動的な感情をもたらすことが明らかになっている¹⁶⁾。そのため、教具を使用した条件の中でもスカーフ条件、ボンボン条件が陽気で楽しそうに見えたことが考えられる。以上より、身体表現を鑑賞させるときには、教具の中でも普段あまり触れることのない素材かつ、彩度の高い色のものを用いることでより興味を持ち、楽しそうに見えることが示唆された。

また、過去の運動経験は、のちの運動に対する活動意欲につながることを示唆されている¹⁷⁾。本研究は、大学生を対象に調査を行ったため、これまでのダンスや身体表現の経験量が異なることが考えられた。そこでダンスや身体表現の経験の有無を同時に調査し、学校の授業外のダンス経験の有無間にて、アンケート結果の比較を行った。その結果、ダンス経験の有無間に有意な差はみられなかった（図7-11）。体育授業の運動の楽しさに関する検討で、鑑賞、応援時はそれまでの運動経験が楽しさに影響しないことが明らかにされている¹⁸⁾。本研究においては身体表現の動画の鑑賞のみであり、実際の身体表現は行っていないため、経験の有無の間に有意な差がみられなかったことが考えられた。以上のことから身体表現を見る場合には、ダンスや身体表現の経験の有無にかかわらず、教具を持った状態が楽しそうに見えることが示唆された。

身体表現の動きのイメージは他者の動きを模倣することによって喚起される⁷⁾。そのため、見本となる保育者が、幼児の前で身体表現を実際に行うことにより、幼児が動きのイメージをもつことができる。その際、保育者が彩度の高い教具を使用して見本となることで楽しそうに見え、活動の動機づけになり、身体表現に苦手意識をもつ幼児が参加できる

ようになる指導の一手段となりうることを期待される。

しかしながら、本研究では大学生を対象に実験を行っているため、幼児の教具に対する興味関心とは異なる可能性が考えられる。今後は本研究で得られた基礎資料をもとに、幼児を対象に実験を行う必要がある。

V. まとめ

本研究では身体表現における教具の違いが、内発的動機づけに及ぼす影響を検討した。

その結果、身体表現の動画を鑑賞した際の楽しさに関するアンケートにおいて、統制条件と比較して、新聞紙条件、タオル条件、スカーフ条件、ポンポン条件が有意な高値を示し、スカーフ条件、ポンポン条件が新聞紙条件、タオル条件と比較して有意な高値を示した。以上のことから、身体表現鑑賞時に、普段触れることの少ない素材であり、彩度の高い色の教具を使用することで楽しそうに見えることが明らかになった。

VI. 参考文献

- 1) 竹田安宏, 城後豊: プレ・ゴールデンエイジにおける運動能力発達を促す「KIDSラダー」の開発: 日本体育学会大会予稿集 (61) .181.2010-09-08
- 2) 文部科学省: 幼児期運動指針ガイドブック
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/undousisin/1319772.htm
- 3) 日本体育協会: アクティブチャイルドプログラム
<http://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/acp/>
- 4) 柳田信也: 幼稚園教師の運動遊びに関する指導理念の調査研究: 国際学院埼玉短期大学研究紀要 29.21-26.2008
- 5) 文部科学省: 幼稚園教育要領解説: フレーベル館2008
- 6) 長野真弓: 幼児における身体表現活動の実践・研究の課題ならびに科学的視点からの提案: 心理社会的支援研究1.29-34.2011
- 7) 鈴木裕子, 西洋子, 本山益子, 吉川京子: 幼児期における身体表現の特徴と援助の視点: 舞踊學2002(25), 23-31.2002
- 8) 平野仁美, 牧野敏枝: 身体表現の保育が子どもと保育者の育ちにもたらすもの: 日本保育学会大会発表論文集(56), 388-389.2003
- 9) 文部科学省: 多様な動きをつくる運動(遊び)パンフレット
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/jyujitsu/1247477.htm
- 10) 遠藤昌: 幼児の身体表現の指導に関する保育者の意識について: 身体表現の指導に関する困難さについてのアンケートの結果を通して: 武庫川女子大学紀要. 人文・社会科学編54.91-99.2006
- 11) 萩本快: 内発的動機づけを促進する親表象: 自我心理学による再構築: 子ども教育学会紀要(7), 13-19.2015-03

- 12) 樽谷将志, 林政孝, 小澤治夫: 子どもの意欲・活動を高める教具を用いた授業研究: 釧路論集: 北海道教育大学釧路分校研究報告37.49-52.2005
- 13) 鹿内菜穂: ダンスの身体表現における感覚認知とインタラクションに関する研究
http://rcube.ritsumeai.ac.jp/bitstream/10367/5765/1/k_933.pdf
- 14) 古市久子: 実践に埋め込まれた理論を抽出する試みⅡ - 子どもの身体表現遊びを発展させる要因について - : 大阪教育大学紀要: 教育科学47(2). 343-355.1999
- 15) 西川一二, 雨宮俊彦: 知的好奇心尺度の作成 - 拡散的好奇心と特殊的好奇心 - : 教育心理学研究. 412-425.2015
- 16) 相馬一郎: 色彩と感情: テレビジョン21(12). 858-865.1967
- 17) 橋本剛幸, 永浜明子: 生涯スポーツにつながる小学校, 中学校, 高等学校の体育カリキュラムの研究 (第1報) スポーツの楽しさを重視した授業を目指して, 生徒のアンケート分析から: 大阪教育大学紀要. 第5部門. 教科教育61(2). 61-72.2013
- 18) 徳永幹雄, 橋本公雄: 体育授業の「運動の楽しさ」にかんする因子分析的研究: 健康科学2.75-90.1980